

漢文の〈思想分野〉の

背景と意義



瀧 康秀

三月下旬の新聞紙面において、終身雇用を支持する人の割合が九割近くにのぼるといふ調査結果を独立行政法人労働政策研究・研修機構が発表した、という記事を目にした。先行き不透明の今日、安定志向が強まっている結果であろう。ただし、会社が社員の生涯に一定の責任を持ち、社員は応分の忠誠を会社に尽くすということを前時代的とは感じず、むしろ理と情とに適っていると感じる人は、欧米に比すれば、常に多数派であろう。このことの背景に存する思想・文化的要因について高校生に読み解かせるのを、地歴・公民科にだけ任せてしまうのでは惜しい。

儒家の思想

漢文の思想分野における必須の教材に『論語』と『孟子』とがある。両書の学習における重要な理解事項として、孔子の教えの中心に仁があるということ、孟子のそれには仁義として仁義礼智の四徳があるということが挙げられる。そしてこれこそが、今日まで東アジアの思想・文化の基盤の一つとなった儒教倫理の原点であると指摘できる。孔子の仁、孟子の四徳は、漢の武帝に仕えた董仲舒とうちゅうしよが継承し、ここに仁義礼智の五徳が唱えられ、これが五常（人の守り行なうべき五

つの道）として確立した。そしてこの五常が人間関係の基本たる君―臣、父―子、夫―婦の三綱（三つの根本的道義）を支える人間性とされた。

漢代以降、儒教が国家の秩序を守る教学として位置づけられるが、これはこの三綱五常を秩序原理とした礼を重んじることよって社会秩序の維持を目指すものであった。そしてこの儒教倫理は、一身から家、家から国、国から天下へと押し広げていくことを志向した。その結果、父が父らしく、子が子らしくあることが、君主が君主らしく、臣下が臣下らしくあるということにつながり、家族倫理の確立こそが、国家の確立の基盤となると考えられた。

家族という、最も身近なレベルの秩序を、社会や国のレベルの秩序の母体と考える儒教倫理は、集団に属することに安心を感じ、組織で秩序を守りつつ動くことを好み、個が集団に貢献する、いわばチームプレーを得意とする、東アジアに特徴的な社会を生み出す要因ともなった。これには歴史的に光と影の部分があることを含めて、我々の社会のさまざまな事象について考えさせるとき、ぜひ注目させたい点である。そして、『論語』『孟子』をはじめとする思想分野の漢文教材を用いた学習の中で、思想・文化を読み解かせる契機ともなろう。

儒教の再評価

ちなみに、儒教は近代中国において痛烈に排撃されてきたが、今その再評価が大規模に行なわれているということも、学習者に事実として認識してほしいことである。これを主な目的とする「孔子学院」が各地に建設され、儒学関係の典籍を

『大蔵経』に習って網羅しようとする『儒蔵』編纂事業も活発である。ナシヨナリズム云々はさておき、儒教倫理が東アジアの文化に果たした役割の大きさを見詰め直そうとする、一連の学術的なアプローチについて留意させておくことは、思想学習への関心を高める上でも大切であろう。

道家の思想

話は変わるが、私が教職に就いた昭和の終わりごろには、「エコロジー」ということはまだ耳新しかった。ところが、この二十年余、地球環境について取りざたされなるときはなくなつた。日々の文化的な営みの副産物が、地球規模の脅威となつて我々に襲いかかってくるのが実感されてきた。

人々の知的営為、文化の発達が大きい自然の営みを傷つけ、逆に人々を苦しめる、という警鐘を、二千年以上前に『老子』が鳴らしていた。そしてその思想は、今日と隔絶した大昔に存在し滅んだ、というものではない。儒家の思想とともに中国思想の二大潮流を形成する道家の思想と、それを教學の一つに持つ道教思想の源泉となり、禅文化などとも交流して日本にも大きな影響を与えてきた。

『老子』の「小国寡民」（第八十章）の章は、文字すら用いないですむ原始的な生活形態こそ、寡欲で争いのない社会を生む、ということを説いている。人間がより幸福になろうとして発達させる文化的営為こそが欲望を助長させ、戦乱を引き起こし、逆に人間を不幸にするのだと、痛烈に文明自体を批判する。『老子』の思想は、元来儒教の形式主義・教条主義の側面に対する批判などから生じたものであるが、人類を滅ぼす力を持つ兵器を、文明を発達させた結果生み出すに至つ

た今日こそ、そのことばの重さにだれもが瞠目させられよう。無論、地球環境についての具体的な言及はここにはないが、『老子』の逆説的論理には、我々の文明の発達が引き起こす大惨事に対して予言的な意味すらあつたことが知られる。

道家の思想の展開

後漢に本格的に流入した仏教は、南北朝期以降、統治の場において大きな力を發揮した。これに刺激を受けた在来の民間信仰は、仏教と交流しつつ徐々に整備され、道教として仏教と並立し、儒教を圧倒する時代も少なからず現出した。道教の成立とともに、老子は早くから太上老君として神格化され、『老子』の書は、その教學における根本經典となつた。やがて『莊子』『列子』もそれに続いた。王朝時代の後も、道教とそれを形成した思想とは、儒・仏と交流しつつ民間で流布し続けた。

既成の価値観から超越、そして万物斉同を説く『莊子』の思想は、芭蕉をはじめとするわが国の文人に大きな影響を与えた。庭園・家屋から太極拳をはじめとする体操・漢方薬に至るまで、大いなる自然とともに生きるという価値観は、今なお東アジアに満ちている。これが、近代合理主義のアンチテーゼと目されてすでに久しい。そのような歴史的展開を学習者に気づかせていくことも、思想分野の学習を活性化させ、楽しいものとさせる一手となるう。

たき やすひで 清泉女学院中学高等学校（神奈川県）教諭。日中の古典学、特に江戸期の漢文学に関する研究を専攻。論文に〈齋藤拙堂「梅溪遊記」と『史記』貨殖列伝〉（漢文学解釈と研究）第十輯所収）などがある。